

【東海第2原発訴訟団、3/31～4/1 福島現地視察、避難者・現地在住者交流へ】

福島第一原発事故から2年。

再び同じ災禍を繰り返してはならないと、私たちは地元にある東海第2原発の差止を求めて国、日本原電を被告に提訴しました。

しかし、私たちは、本当に事故の恐怖の現実感や、避難の困難さを知っているだろうか。

「地域」という社会が丸ごとなくなり、近隣も、友だちも、親戚も、家族でさえ離散し、地域経済もふくめて一瞬のうちに人々の営みが失われるということがどういうことか。

家族がいかなる思いをしているか、子どもたちにとって友だちを失うことがいかなることか、国が勝手に決める境界線で区別され、避難区域外で放射能が高くても、なお残らざるを得なかった人、家族を置いてもお避難したことで苦しい思いをせざるを得ない母子。

そして一瞬のうちに、家も仕事も商売も捨てて、田畑も海も捨てて逃げざるを得ないということがいったいどういうことか、同じ原発や密集する核関連施設が身近にあるということが何を覚悟しておかなければならないのか、本当はよくわかっていないのではないか……。

今もなお、毎日2億4000万ベクレルの放射性物質を放出（東電発表）していながら、住民の

ふるさとへの愛着を逆に20ミリシーベルト／年を容認させ、「帰還」を強制する「区域見直し」再編（下記図）は、新たな「安全神話」を生み、かつての住民の中に再び何をもちたらずのか。

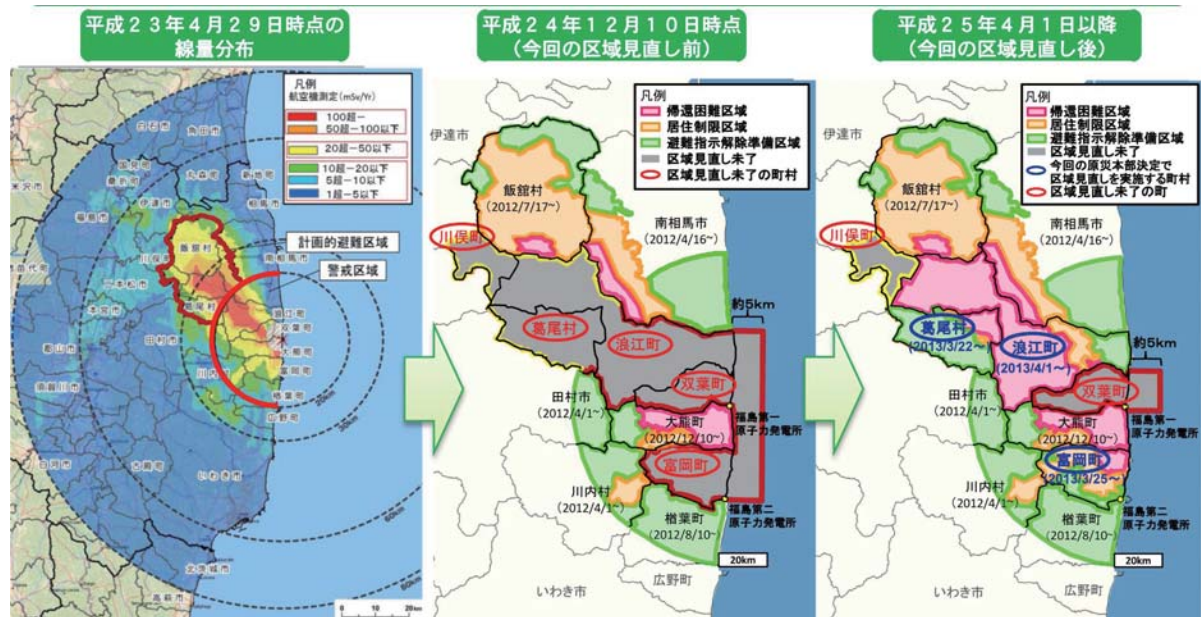
加えて、国民の分断と忘却の中で、「いつまでも……」という新たな分断と差別が醸成されていく地ならしか……。

そしてなお、身の危険を賭して、下請け労働として原発事故処理に入っている人たちが戻る場所として、最低50年という年月という廃炉の事故処理作業従事者が周辺に住む。

そんな思いから、訴訟団の原告と弁護士共に、総勢30名でいわき駅に集合し、バスをチャーターして20km圏の榎葉町、封鎖線のある富岡町まで行き、現実に町がどのようなになるのかをこの目で見、そしていわきに避難してきた住民や、いわきで被ばくした住民からお話を聞く機会を企画しました。

原発災害の現場をこの目と身体で感じて、聞きとり、福島の解決なくしていかなる原発も稼働を許さないこと、そして再びの災禍を繰り返さないことを法廷でも訴え、また周囲に伝えて、東海第2原発をなくすために、学びに行ってきます。

（大石）



【ものづくり 人づくり 地域づくり】 特集 震災から2年 東北は今 (3) 中面にて

「健康で経済的」「分かち合い、支え合い、共に生きる」協同組合へ

2013 年度スタート

半年にわたる私たちの協同組合事業の立て直し議論。
4月新年度より新しい制度で「基本料・配達料」をお預かりしながら、新しい時代のみんなの協同組合を模索します。

2年前の4月、春なのに春でなかった春。

価値観を変え、暮らし方を変え、生活や社会を見直す大きな転換点となりました。すでに戦後の高度成長を支えた大量生産と大衆消費社会のピークは過ぎ、新たな時代の生活スタイル・価値観の模索がはじまろうとしていた矢先の出来事。日本社会はいやおうなく人口構造的に変わり、新たに共助や協同、分かち合い・支え合い・見守りながら助け合って暮らす時代に入りつつあるのは間違いない歴史の流れでした。

ところが奇妙なことに今、私たちの国、この日本で起きていることは、弱者切り捨て、被害者見捨て、生命や子どもより再び経済、忘れること、犠牲は仕方ないから偽りの「復興」で。いっそうの格差と犠牲を強いて、責任も事故原因もあいまいにして「みんなで忘れる道」を歩もうと。再びバブルの夢を追う如く「成長戦略とデフレ脱却」を叫んで金融緩和で国民の資産を溶解させ、バラマキで次世代にツケをまわす時代錯誤の古典的アベノミクス。ひととき浮かれたのち消費増税が来る。

TPP参加で食糧自給や社会医療を放棄し、儲けのための世界サプライチェーンに身を任せ、放射線「被ばく」さえも世界標準・グローバルスタンダードに！と。チェルノブイリと同様、我が子の健康を心配する日本の母親らを黙らせようとする世界包囲網。きな臭さを演出して再び集団的自衛権行使と憲法改正へ。歴史は繰り返される。

わたしたち協同組合は、一瞬にして弱者となった子らや被害者、被災者に心寄せ、忘れることなく持続的に自分たちの暮らし方を問い、そしてこの社会を問い返ししながら、分かち合い、支え合う新しい価値観と行動への道をみんなで模索する2013年度にしたいと思います。

くらしと家族の健康の砦、地域をつなぐ良心として協同の足元を固める再スタートを切ります。4月より基本料や配達料をお預かりすることとなりますが、必ずや「健康で経済的なくらし」に役立つ生協として、みんなでよりよい協同組合にしてゆきましょう。

4月より春の組合員一斉討議、6月総代会が予定されています。



【被災地、東北は今(3)】福島・相馬はらがま、松川浦 この浜で生きる。この地で生きる。相馬松川浦

福島県相馬双葉漁協、相馬はらがま、松川浦

■日本一の浜、相馬松川浦。そして震災・津波・原発事故。

かつて、高級鮮魚出荷の水揚げ港で名を馳せた、福島県相馬市原釜（はらがま）漁港。大消費地の首都圏に近く、且つ多様な魚種が豊富に水揚げされることから、全国から注目された漁港でした。通常の漁港では土間に直置きされるところ、傷がつかないようにサイズ別にコンテナに入れ、高品質の魚を消費者に届ける努力を港に集うみんなで行って来ました。全国の港町で高齢化が進む中、多くの若い人たちが働き、とても活気あふれる港でした。こうした相馬の人たちの心意気が感じられる魚を、私たち組合員も頂いてきました。

そして2011年3月11日。高さ30mに迫る大津波は港町を破壊。479人の尊い命も奪いました。続く東京電力の原発事故は人々の誇りである前浜を汚染し、今でも本格操業はできていません（現在は、たこ、いか、つぶ貝、毛がにの4魚種が試験操業対象魚として漁獲され、それ以外の魚が獲れた場合、沖で廃棄しています。試験操業の回数は週1回程度で漁自体もまだとても少ない状況です）。

市内の経済の7割を水産関連業で占めていた港町の仕事は激減し、多くの働き手は市外、県外に職を求めて相馬を離れました。他方で、福島第一原発近くの飯館、浪江の故郷を追われた人々を相馬市は受け入れし、お年寄りを中心に今でも多くの方が市内の仮設住宅で暮らしています。市の人口は震災前の38,000人から36,000人に減少しました。

■この地で生きる人たちと全国がつながって。
相馬はらがま朝市クラブ

【コラム】福島相馬と、茨城千葉・北相馬郡の縁

その昔（鎌倉時代ころのようです）、現在の取手、守谷、千葉の流山周辺の北総領主だった相馬氏が幕府から戦功を認められ、東北に領地を分け与えられて、一族で福島に移り住んだとのこと。

「菊池さん」とか「千葉さん」という名字が相馬にも多いのはこのことも関係しているようです。

ゆかりの地ということで取手市と南相馬市は姉妹都市となり、震災時も取手市は南相馬市からの避難者を迎え入れています。

また、関東鉄道常総線の南守谷駅の地下通路に「相馬野馬追い」の壁画が飾られています。



働き手の多くが町を去るなか、「もう一度、私たちの手で活気ある浜通りを復活させよう！」と立ち上がったのが、NPO相馬はらがま朝市クラブの皆さんです。その中心となり、現在はNPOの代表を務めるのが、かつて常総生協に相馬の鮮魚をさばき、送ってくれていた高橋永真さんです。

自らが経営する水産加工工場（センシン食品）は津波で全壊。従業員は全員解雇。それでも高橋さんは震災直後から地域の人々を励まし、毎週末「相馬の朝市」を開催しました。常総生協組合員から募った冬物衣料やホットカーペットなどの支援物資、また生産者からの野菜などの食料品をトラックで運び、週末の朝市を通じて相馬の人たちに届け、大変喜ばれました。

■「原料を無くした港町」で水産加工を始めること

「支援物資を頂いているだけではだめだ。仕事づくりを。もう一度魚に触れる仕事をしよう」と動き始めた高橋さん。福島県沿岸部で被災した水産加工工場が再び開業する事例はなく、高橋さんが最初でした。常総生協に集う生産者（塩屋さん）からは機械の提供、話を聞いた全国からの支援もあり2012年春には「相馬復光第一加工場」を稼働。「前浜の魚は暫く使えないけれど、県外からの原料で加工を続けます。仮設住宅にいる人を何人かでも雇えるようにしよう」と始まった加工場。現在、仮設住宅から5人の女工さんを雇えるようになりました。

この間、全国から原料提供の輪が広がっています。なかでも、昨年4月に相馬で開催した常総生協業者会にて、高橋さんは白鷹農産加工研究会の皆さんと出会い、白鷹産の甘酒を漬魚に使う試みを開始。

甘酒味噌漬は「相馬の新しい味」として組合員にも好評です。今回（4/1回）カタログの111番「真いか甘酒味噌漬」をぜひお試しください。



「松川浦青のり養殖復活プロジェクト」青のり養殖漁師久田さん 初年度 240ペクレルから2年目 80ペクレルへ。今年こそは万全の対策、実験で

その地に固有の種が定着し、味、香り、つや、色合いと、「これぞ松川浦の青のり」とされた松川浦の天然種の「青のり」養殖。

毎年9月初旬から網入れ→種付け→仮殖→本張り→続き、年明けから春にかけて収穫されて、私たちの食卓に届けてくれました。

3.11の津波で、堤防は決壊し、浦内の養殖場も船も、加工場も流され、壊滅でした。漁師たちも自失。

その中で、一人養殖を復活させると筏を組み出した漁師が久田要一さんでした。センシン食品の高橋さんの元で働いていた経験もある後輩で、家を流されて仮設住宅に入ったみなさんを支援する地元NPO相馬はらがま朝市クラブのメンバーでもありました。その縁で、NPO相馬はらがま朝市クラブを通して常総生協も応援することに。「松川浦青のり復活プロジェクト」。

○松川浦在来種が復活

組合員からお預かりした「復興基金」を使わせて頂き、被災した年の10月には筏と網を新たに組み直し、網入れ。

松川浦在来の種は流されて壊滅し、もうつかないかも知れないとの心配をよそに見事に在来の種が付き、自然のたくましさも感じました。

○立ち上がる放射能汚染

2011年12月15日、震災後初めての青のり収穫。早速、原藻（生）を常総生協で放射能検査。検出限界5ペクレルで「不検出」。

やった～！と思ったのもつかの間、乾燥させた青のりは何と240ペクレル/kg。初年度の供給は泣く泣く断念。



○2年目、再び

そして2012年、2年目。相馬双葉漁協松川支所の青のり養殖漁業者協議会で「福島第一原発事故の放射能により24年度のり養殖は自粛する」ことが決定される。しかし、天然種維持のための試験養殖だけはおこなうことが確認されました。

そして久田さんの養殖も2年目。11月には生協で浦の「海水」の放射能調査も実施。15時間かけてセシウム各0.108、0.088の検出限界まで測定しても「不検出」に。1月には浦に流入する河川水も調査測定で「不検出」（<0.096、<0.098）。

1月収穫した原藻（生）も「不検出」。しかし恐ろしいことに、乾燥させた青のりは80ペクレル/kg。再び組合員へのお届けは断念。しかし、初年度240ペクレルが2年目80に低減している。

○今年こそは

今年は、東大や国立環境研の協力も頂きながら、9月までには低濃度セシウムの測定体制も組み直して環境水（海水）のセシウム濃度を測定すると同時に、海水から海苔への吸収メカニズムから低減化対策を実験して、来年こそはの意気込みで今準備中です。みんなで見守り、応援しましょう！

青のり養殖漁師 久田さんから組合員へ

このたび、ようやく乾燥場の修理が終わり、のり乾燥機（写真）を納めることが出来ました。震災後、機械、資材等すべて流され駄目になり、どうしたらよいか、ただ、漠然と海苔養殖業はやりたいと、でも不安な気持ちでいました。

そんな時、常総生協さんからの支援の話を頂き、もう一度やりたいと、一歩踏み出せたのが事実です。

ありがとうございました。

しかし、まだまだ松川浦には問題があり、放射能、風評被害、浦内の整備などさまざまな難題があり、なかなか前に進めない状態で、組合員のみなさまの食卓に松川浦特産の「青のり」をまだお届けできません。

来年こそはと、希望をつないで、天然種の網を広げています。今後ともご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。 2013年3月14日 久田要一

